

くる。

福岡・博多には博多どんたく港まつりと博多祇園山笠、二つの大きな祭りがある。
この二つの祭りだけで、500万人の観客を動員する福岡・博多は「祭りのまち」だ。
毎月、何がしかの伝統ある祭り、新しい賑やかな祭りが開催されている。
祭りは「人」であり、地域の「文化」だと言われる。
祭りを通して、地域コミュニティのあらゆる世代の交流が生まれ、
祭りの力が、地域の文化を深め、人を呼び、さらに発展させていく。
いま、少子高齢化という人口減少社会へ向かう中、
多くのまちが、地域コミュニティの維持・発展の在りようを模索している。
地域とともに在るために——祭りに参加し、祭りを牽引することで、
「地縁」をつくり育む、西日本鉄道の取り組みをレポートする。

文◎茶木 環／撮影◎三好邦次



7月



◎博多祇園山笠 櫛田神社(福岡市博多区、旧博多部一帯) 7月1日～15日

●1日 夕 当番町お汐井とり
当番町が箱崎浜までお汐井(真砂)を取りに行く。

●9日 夕 全流お汐井とり
全流が箱崎浜までお汐井を取りに行く。

●10日 夕 流昇き
それぞれの流の区域内を昇き回る。

●11日 早朝 朝山
祝儀山とも呼ばれ、長く町に貢献した功労者が台上がりする。
夕 他流昇き
ほかの流の区域に出て昇き回る。

●12日 午後3時59分 追い山ならし
3日後に迫った「追い山」のリハーサル。

●13日 午後3時30分 集団山見せ
昇き山笠が那珂川を渡って福岡部を走るのはこのときだけ。

●14日 夕 流昇き
追い山に向けての最後の練習。

●15日 午前4時59分 追い山
一番山笠から順に櫛田入りする。櫛田入りにかかる時間とゴールの廻り止めまでにかかる時間を、それぞれ競う。

写真上: 集団山見せ 中: 全流お汐井とり 下: 十三番山笠ソラリア

9月 ●放生会 ほうじょうや 筥崎宮 9月12日～18日
仏教の殺生戒(せつしょうかい)に基づき、鳥や魚を自然に帰す放生神事が行われる。博多三大祭りの一つで、参道には数百軒の露店が並ぶ。



(写真提供: 福岡市)

●神幸式大祭 太宰府天満宮 9月20～25日
菅原道真公の御神徳を仰ぎ、五穀豊穡を神明に感謝する大祭。

◎MUSIC CITY TENJIN

天神など都心部一帯 9月中

天神各所に特設ステージが設置され、プロ・アマ問わず多くのアーティストが出演する。すべての会場で入場は無料となっている。

●アジアンパーティ 福岡市内各所 9月～10月
「アジア太平洋フェスティバル福岡」「アジアフォーカス・福岡国際映画祭」「福岡アジア文化賞授賞式」など「アジアと創る」をコンセプトに、期間中、福岡市内各所で多彩なイベントを展開。

10月 ●中洲まつり 博多中洲一帯
10月第1木曜日～土曜日
500人の女性がみこしをかつぐ「國廣(くにひろ)女みこし」、「はしご酒大会」などを開催。

●ふくこいアジア祭り
福岡市内各所 10月～11月

●博多おくんち 櫛田神社 10月23日～24日
約1200年前から伝わる秋の実りに感謝する大祭。牛車に曳かれるみこしを先頭に、稚児行列や獅子頭などの「御神幸」、踊り隊やブラスバンドなどが櫛田神社を出発して博多のまちを一巡する。

11月 ●大相撲九州場所 福岡国際センター
11月第2土曜日の翌日の日曜日から15日間

●天神のクリスマスへ行こう(クリスマスイルミネーション)
福岡市内各所 11月中旬～12月下旬

12月 ●福岡国際マラソン
平和台陸上競技場～香椎(折り返し)
12月第1日曜日

●年越厄除大祭 若八幡宮 大晦日
新暦と旧暦の大晦日に行われる。厄払いの神社として有名で「厄八幡」の愛称で親しまれている。

「博多もんは祭り好き」 地域の活力は祭りがつ

福岡市と近郊の主な年間行事

1月 ●玉取祭（玉せせり）^{はこぎせり} 筥崎宮 1月3日
江戸時代に始まった正月行事。締め込み姿の氏子たちが江戸側と陸側に分かれ、玉を競って1年間の吉凶を占う。

●鶯替え・鬼すべ ^{うす} 太宰府天満宮 1月7日
「鶯替え」は木彫りの鶯を交換して1年間の幸福を祈念する神事。「鬼すべ」はその年の災難消除や開運招福を願って行われる火除け神事。

●十日恵比須正月大祭 十日恵比須神社
1月8日～11日
商売繁盛、五穀豊穡を祈る正月の大祭。

2月 ●節分大祭 櫛田神社・東長寺ほか 2月3日

3月 ●曲水の宴 ^{まぎくすい} 太宰府天満宮 3月第1日曜日
平安時代の宮中行事を今に再現する禊祓（みそぎはらえ）の神事。

●おおほりまつり
福岡城跡（舞鶴公園）3月下旬
福岡藩初代藩主の黒田長政と家臣24騎に扮した「黒田二十五騎」、少年武者・稚児が練り歩く。

4月 ●福岡城さくらまつり
福岡城跡（舞鶴公園）3月下旬～4月上旬

7月 ●小倉祇園太鼓
小倉城周辺（北九州市小倉北区）7月1日～19日
山車の前後に載せた太鼓を若衆が威勢よく打ち鳴らし、町中が勇壮な太鼓の音で覆われる。340余年の歴史を誇る小倉の夏祭り。

●戸畑祇園大山笠
北九州市戸畑区 7月第4土曜日を挟む3日間
博多祇園山笠、小倉祇園太鼓とともに福岡県夏の三大祭りの一つ。昼の幟山笠が夜になると提灯で彩られた「光のピラミッド」に姿を変える。

8月 ●西日本大濠花火大会 ^{おおほり} 大濠公園 8月1日

●わっしょい百万夏まつり
小倉城周辺（北九州市小倉北区）8月第1土曜日・日曜日
昭和63年、市政25周年を機に誕生した市民参加型の祭り。現在では期間中、約300団体・2万人余りが参加し、150万人を超える見物客が訪れる。

●水の祭典久留米まつり
久留米市六ツ門町周辺 8月上旬
久留米市民あげての夏祭り。パレードや1万人のそろばん総踊り、太鼓響演会、花火大会などさまざまな催しを実施される。



●博多どんたく港まつり
福岡市内各所 5月3日～4日

●3日 午後1時頃～パレード

●4日 午後3時頃～パレード
午後6時頃～総踊り



写真上：パレードに参加する西鉄どんたく隊
中・左：地元保育園児を招いてのにしてつ花自動車点灯式
中・右：西鉄どんたく隊の合同練習風景
下：福岡ヤフオク！ドーム内を走行するにしてつ花自動車



博多どんたく

春のGW期間中、全国でもトップクラスの人出で賑わう「博多どんたく」は、新年を祝う行事を起源とするだけに、賑やかで華々しい。地元企業である西鉄は、「縁の下」と「表舞台」、両方からこの祭りを支え、地域を盛り上げている。

あらゆる場面で祭りに深く関わる

全国的にも知名度が高い「博多どんたく」は、830余年の歴史を持つ「博多松囃子」（国選択無形民俗文化財）が源流とされる。福祿寿・恵比須・大黒天の三福神と稚児から成る松囃子が時の権力者のもとへ年賀の祝いに回る行事で、江戸期になると、洒落つきの多い博多町人が趣向を凝らした出で立ちや出し物で松囃子の後に続いて回った。これが「通りもん」で、三福神・稚児・通りもんが、現在の博多どんたくの原型となっている。また、明治期からオランダ語の「ゾンターク（休日）」を語源に、「どんたく」と呼ばれるようになった。

戦時中は中断されていたが、終戦の翌年、人々は戦災を免れたところから三味線や太鼓を借り集めて瓦礫の町を練り歩き、昭和22年には博多どんたくが開催された。その後は、年に一度の無礼講の行事として年々盛んになり、昭和37年から市民総参加の「福岡市民の祭り『博多どんたく港まつり』」となっている。

現在、博多どんたく港まつりは、毎年



西日本鉄道株式会社
総務広報部 部長

永竿哲哉
Tetsuya NAGASAO

5月3日と4日に開催。有志の集まりや学校、企業などの各種団体による「どんたく隊」と呼ばれるグループがパレードに参加し、演舞を披露する。約3万人が思い思いの衣装で行進し、国内外から200万人以上の観客が訪れる全国でも有数の規模の祭りに発展した。

この博多どんたくに毎年、西鉄もグループを挙げて参加している。企業は通常、地域の祭りに対して、協賛や後援という立場に立つことが多いが、福岡・博多の祭りに対する西鉄のスタンスは、それとは大きく異なっているようだ。積極的に参加し、祭りそのものに深く関与して、ともに祭りを盛り立てている。

永竿哲哉総務広報部長は、「外から見ると不思議に思われるかもしれないが、われわれにとって特別なことではなく、地域に根差している企業であれば当たり

特集：祭りと地域コミュニティ

〔西日本鉄道が育てる新しい「地縁」のかたち〕

前という感覚」だと語る。
西鉄グループの社員も毎年、「西鉄どんたく隊」を結成して、パレードに参加する。倉富純男社長を先頭に、新入社員、社員有志、グループ内の学校法人の



「西鉄どんたく隊」メンバー

左／角銅理帆さん（西日本鉄道株式会社 自動車事業本部 業務課 業務課）

右／吉武修平さん（株式会社西日本アカウンティングサービス アカウンティング事業部 西鉄担当）



1

1 博多松離子の三福神。馬にまたがり、各所を祝い回る（提供：福岡市）。2 総勢200人の西鉄どんたく隊。3 新天町の演舞台では三味線演奏を披露。



2



3

学生、それに地元の劇団「ギンギラ太陽's」や九州産業高校のプラスバンドなどが加わったメンバー総勢約200人で福岡・博多の街を練り歩く。
総務広報部の吉田亮庶務課長の説明に

よれば、「タオルやバンダナ、Tシャツなど、毎年、オリジナルのものをづくり、共通のアイテムを着けて一体感を高めている。また、ギンギラ太陽'sの皆さんだけではなく、新入社員を中心に約50人が、西鉄の電車やバス、ビルのかぶり物を付けて行進する」という、まさに現代の通りもんスタイル。今年は企業メッセージの「まちに、夢を描こう。」を集団で表現し、後日発表されるどんたく隊賞人気コンクールでは、アイデア賞に当たる「西島伊三雄賞」を受賞した。

今年、初参加した新入社員の角銅理帆さんは「最初はかぶり物に抵抗があったが、私たちが通ると、沿道の方々が手を振ってくださった。自分の会社がとても親しまれているんだと実感できて嬉しかった」と言い、吉武修平さんは「自分の会社が地域と深くつながっていることが分かった。会社と地域の発展を目指して、少しでも役に立ちたいという思いが強まった」と語る。

普段はまちづくりの黒子的な役割で業務に励む社員たちが、華々しいパレードへの参加は、市民の自社への期待を受け止める格好の機会となったようだ。

博多どんたくが盛り上がる要素としてはもう一つ、「演舞台」の存在が大きい。市内30数カ所に設置される演舞台では、どんたく隊や飛び入り参加の市民が歌や踊りを披露する。西鉄も、西鉄福岡（天神）駅と直結した商業施設・ソラリアプラザ内に「天神ソ

ラリア演舞台」を設置している。

さらに注目したいのが、個々の社員の地域との強いつながりだ。一例を挙げると、西鉄がまちづくりを進めてきた天神地区内の新天町商店街は戦後復興期から「新天町どんたく隊」を結成してパレードに参加しており、演舞台では伝統的な三味線演奏を披露している。ここに毎年、西鉄社員も加わり、一緒に行進して、演舞台でも演奏を行っている。企業体としてだけではなく、個人レベルでも地元溶け込み、地縁を育んでいると言えるだろう。

名物として定着した花自動車

また、西鉄では交通事業者である特性を活かし、「にしてつ花自動車」を運行。そのきらびやかな姿は博多どんたくの名物として定着し、人気を博している。

かつて、この役割を担ったのは路面電車にさまざまな装飾が施された「花電車」で、明治期から祝事で運行されていた。

「昭和24年から博多どんたくでも運行されるようになった。祭りの風物詩として、毎年楽しみにしてくださる方が多



西日本鉄道株式会社
総務広報部 広報課 課長

三島二郎
Jiro MISHIMA



1昭和22年運行の戦後初の花電車「富士山」。2昭和25年運行の花電車「祝商工祭」。3今年も6台の花自動車が運行。44月末に行われた西鉄どんたく隊の合同練習。振り付けなどを最終確認する。5パレード出発直前まで繰り返し練習するメンバー。

かったようだ」と総務広報部の三島二郎
広報課長は解説する。

路面電車の廃止で、福岡市民に愛され
た花電車は昭和50年に休止されたが、花
電車を懐かしむ声に应运て、2年後に

「花自動車」として復活した。

現在、運行する花自動車は6台。地元
のスポーツチームや童話、アニメなどを
テーマに装飾。1台当りに使用される
電球は約1200個、造花は1万個とい

うきらびやかさだ。

市民から愛される花自動車は博多どん
たくの日程前後も活躍している。4月には
地元保育園児を招待しての点灯式、
「福岡ソフトバンクホークスVS埼玉西武
ライオンズ（どんたく博多デー201
5）」の一戦では、福岡ヤフオクドー
ム内を走行した。

市内走行は5月2日から4日までの3
日間。博多どんたくのパレードでは、助
手席に子どもたちを乗せて運行し、子ど
もの日には遊園地「かいしかえんシルバ
ニアガーデン」に展示、記念撮影する親
子連れで賑わった。

ちなみに、花自動車のハンドルを握る
ことができるのは、グループ内から選抜
された優秀な運転士。花自動車を担当す
るのはとても名誉なことで、達成感を感
じる業務だという。

開放的な風土が祭りを発展させる

参加者も観客も高揚し、まさに街中が
賑わう博多どんたくだが、福岡・博多の
おほかで開放的な風土が祭りをさらに
特長あるものになっているようだ。パレ



西日本鉄道株式会社
総務広報部 庶務課 課長

吉田 亮
Ryo YOSHIDA

ドには「新潟市どんたく隊」
や「マレーシアどんたく隊」
など国内外からも参加、国境
や宗教色もない自由奔放なパ
レードが進む。祭りの最後
は、各演舞台を中心に市内各
所で行われる総踊りで締める
が、観客も飛び入りで参加で
きる。そして全員で、夜が更

けても熱気が冷めやらずに、「もう一回」
と何度も踊りが繰り返されるそう。

「江戸時代には商人の町・博多と城下
町・福岡を分断する石垣で隔てられてい
たが、正月年賀の松囃子の時だけ、博多
町人は福岡の町に入ることができた」と
永竿部長が言うように、祭りのたびに地
域内外の人々がさまざまな壁を取り払
い、熱く交流を深めてきたのかもしれな
い。

「人が集まることで、当社の電車やバ
ス、あるいは商業施設の利用者が増える
ことも有り難いが、福岡・博多の街の勢
いを持続させることが重要。祭りに対す
るわれわれの姿勢は、まちづくりに取り
組む当社の企業姿勢に通じる」と永竿部
長は語る。

市民総参加と言われる賑わいの最中、
表舞台に立たずとも、混雑する街中の交
通整理をはじめ、駅や商業ビルなど関連
施設で汗を流す西鉄の社員が大勢いる。
さまざまな形で「自分たちのまちの祭
り」を実直に支える企業や人が存在する
ことによって、博多どんたくは伝統と今
日性が共生する都市の祭りとして発展し
てきたのだろう。

柔軟な発想が まちをつくり、夢を描く

MY OPINION

ギンギラ太陽's は、天神地区の交通、流通など業界事情を徹底取材し、地元密着の舞台を展開している。あらゆるものを擬人化したユニークなかぶり物で表現される作品には、西鉄の電車やバス、ビルが登場する。このまちの物語を編み出してきた立場から、西鉄という企業についてお話しいただいた。

劇団「ギンギラ太陽's」

大塚ムネト

Muneto OTSUKA

博多どんたくではかぶり物と一緒にパレード

僕らの劇団はすべて実名で脚本を制作しています。活動を開始してまだ1年目に、かぶり物をして西鉄バスを題材にした作品を上演して西鉄の本社から電話がかかってきた時には、「あ、見つかった。もう終わりだ」と思いました（笑）。すると意外なことに「面白いから一緒にイベントをやろう」とおっしゃった。西鉄が、地元企業では初めて、僕らを表玄関から入れてくれたんです。その懐の深さ、柔軟な発想に感動しました。

博多どんたくもそうです。「かぶり物をして皆でやろう」。西鉄どんたく隊の社員もかぶり物をする提案されて、正直、驚きましたが、嬉しかったですね。何よりお客さんが喜んでくれることをとても大切にしているんだなと思いました。以来12年間、西鉄の皆さんと一緒に参加しています。

この街に生き、街を語り続ける

僕は新人時代、この福岡で表現者として生きていきたいという思いを抱えながら、10年の間、もがき続けていました。そんな時、ふと街を見ると、ちょうど天神地区の第2次流通戦争の頃で、どんどん新しいビルができて、まさに街が動いていた。「これは面白い」と思って、天神の街を題材にした芝居をつくりました。『天神開拓史』という、福岡大空襲を背景にいに天神の街ができていったかという物語です。

劇中ではビルも乗り物も擬人化して、喜怒哀楽を表現します。観客は劇場を出ると、直前に自分が感動したり泣いたりしたものが目の前にある。劇場に入る前には見えていなかったかもしれない景色が見える。そんな演劇が西鉄をはじめ地元の皆さんに受け入れられ、面白がっていただいて、僕らは現在も活動ができています。表現者として、この街で生かしてもらっている。だからこそ、この街の物語をしっかりと語り続けることが僕らの使命だと思っています。

全国ツアーにも出ますが、他の都市に行くと初めて、福岡からこの表現活動が許されているんだと実感しました。自由なイメージがある札幌や仙台、東京や大阪でさえも実名で上演していることに驚かれます。「博多は芸どころ」という言葉もあ

り、才能がある人も多いのですが、自分ではやらなくても芸事を面白がる気質の人々がいて、アーティストを支え、育ててくれる環境があるからこそ、芸事が花開くのだと思います。

僕らのホームグラウンドは西鉄ホールで、ホール完成時には『天神開拓史』で地元のこけら落としをさせてもらいました。以来、最新エピソードを付け加えながら、節目ごとに上演しています。

西鉄が一からこの街をつくってきた

天神の歴史をひもとくと、約100年前、田んぼしかなかったこの街に、渡辺與八郎が私財を投じて道路（渡辺通り）をつくり、真ん中に軌道を敷いて、西鉄の前身のひとつである博多電気軌道をつくった。もう一人の立役者は電力の鬼と呼ばれた松永安左衛門で、西鉄の前身・福岡電気軌道をつくります。そして松永安左衛門の盟友、日本初のターミナル百貨店・阪急百貨店で成功した小林一三がサポートして、九州初のターミナル百貨店ができた。それらが今の天神につながっている。まちに夢を描いて、この街の基礎をつくったわけです。フロンティア精神を持った人々が出会うべくして出会いながら、街ができていく。この街の成り立ちはそこが面白いんです。さらに言えば、渡辺與八郎はアジア進出を構想に入れていた。これも現代の福岡市につながりますよね。

そんな風に地元住民の視点から西鉄を見ると、西鉄は一からこの街をつくってきた。だから博多どんたくにしても、街の祭りにただ参加しているのではなくて、自分たちがつくってきたまちの祭りを自分たちで盛り上げるのは当然という感覚なのではないでしょうか。

西鉄の「まちに、夢を描こう。」という新しい企業メッセージには、僕は「まちづくりルネッサンス」のようなものを感じ

ています。「お、また何かが始まるのか!」と胸をときめかせ、このまちの「これから」をとても楽しみにしています。



Profile

福岡を拠点とし、九州で最大の動員力を誇る演劇集団「ギンギラ太陽's」を主宰。劇作家・演出家・役者・造形師。地元密着にこだわり、流通や交通などの業界を徹底取材し、史実ありきの物語として作品化している。



博多祇園山笠

770年以上もの間、引き継がれてきた福岡・博多の伝統行事「博多祇園山笠」は時代に即した変化を取り入れながら、興隆を極めてきた。このまちの発展の根幹には、人々の拠り所となる祭りの存在が大きい。

勇壮な昇き山笠と
華麗な飾り山笠

博多どんたくが終わっても、福岡・博多の人々の熱気は冷めやらない。翌月からは「博多祇園山笠」の本格的な準備が始まる。そして、この祭りで福岡・博多の夏は幕を開ける。

博多祇園山笠は、博多の総鎮守である櫛田神社の祇園大祭に際して、この地域の人々が夏の疫病封じを願う奉納神事であり、国の重要無形民俗文化財に指定されている。毎年7月1日から15日まで、半月にわたってさまざまな行事が執り行われ、期間中には約300万人が祭りの見物に福岡・博多を訪れる。

770年以上も続くこの伝統行事には地域が積み重ねてきた歴史が息づいている。象徴的なのはその運営システムだ。豊臣秀吉による「太閤町割り」で十数カ町連合の自治組織「流」が再編しながら現在も生きており、「昇き山笠」「飾り山笠」を運営する。

博多祇園山笠振興会の豊田侃也会長は、「昇き山笠は非常に勇壮で、飾り山笠には優美さがある」と語る。

「ご神体である昇き山笠は「大黒流」「東



博多祇園山笠振興会 会長

豊田侃也

Kanya TOYODA

流」「中洲流」「西流」「千代流」「恵比須流」「土居流」の七つの流が運営する。昇き山笠の大きさは高さ4.5m、重量が1t。台回りにいる昇き手が交代で担い、後押しの力で前に進む。

「山には棒が6本あり、位置によって高さが異なるので、身長差があっても誰でも山笠台につける。また、右肩・左肩と利き手で担う。これが先人の知恵であり、昇き山笠の魅力」と豊田会長は話す。

祭りの後半、それぞれの流域を昇いで清める10日の流昇きから山笠が動き始め、12日の追い山ならし、13日の集団山見せでは七流が揃って勇姿を見せる。山笠のクライマックス、15日の追い山では、七流の昇き山笠が5kmの行程の速さを競って、払暁の博多のまちを疾走する。

対する「飾り山笠」は福岡市内14カ所に建てられ、7月1日から一斉に公開され

特集：祭りと地域コミュニティ

〔西日本鉄道が育てる新しい「地縁」のかたち〕

る。高さ十数mにも及ぶ豪華絢爛な飾り山笠は、流が運営する山笠のほか、商店街や企業が独自に建てるものもある。「博多祇園山笠はもともと博多の祭りだったが、近年は地域外の商店街や、西鉄や福岡ヤフオク！ドームなどの企業が

飾り山笠を建てるようになり、祭りのエリアが広がった。今では福岡市の祭りとも言える」（豊田会長）
西鉄が拠点とする天神地区では、昭和24年に「新天町」が博多のエリア外で初めて飾り山笠を建て、平成3年には西鉄



■博多祇園山笠のクライマックス、15日の追い山。山笠の参加者で道が埋め尽くされる。■子を抱き、孫の手を引き、山笠と走る。■13日の集団山見せ。昇き山笠と昇き手に勢水（きおいみず）がかけられる。

が中心となる「ソラリア」が加わり、平成17年からは「天神一丁目」も建てている。福岡市内の中でも、飾り山笠が集積する地区となっている。
山笠は、毎年、新しく作り直すのが特徴だ。それだけ費用的負担も大きいのだが、それでも「山笠のためなら惜しまない」伝統がある。
「福岡の文化を醸成する取り組みの一環として参加することが決まった」（永竿部長）という飾り山笠「ソラリア」は、ソラリアプラザ1階のイベントスペース・ゼファに建てられる。飾り物は、博多人形師の置鮎正弘氏、小嶋慎二氏が制作。今年の飾り山笠の表題は、表が「風雲桶狭間」、見送り（背面）が「筑紫曙千三百五十年」だった。
ソラリア飾り山笠の題材は、西鉄沿線の歴史ロマンを取り上げることが多い。例えば、これまでに古代中国の秦の時代に不老不死の薬を求めて来日した徐福伝説や福岡藩を治めた黒田家まつわるものなどを選んでいるが、平成17年の飾り山笠には、西鉄らしいこんなエピソードがある。
「この年に起きた福岡県西方沖地震では、福岡市西区の玄界島で住宅の半数が全壊する被害が出た。復興支援の気持ちを込め、玄海島に伝わる百合若伝説をテーマに飾り山笠を建てた」（永竿部長）



西日本鉄道株式会社 取締役 執行役員
都市開発事業本部 本部長

清水信彦
Nobuhiko SHIMIZU

地域の子どもたちは、昇き山笠の4分の3の大きさの子供山笠を昇くことで、山笠の昇き方だけではなく、その意義を理解していくのだという。祭りを通して、地域の大切なコミュニティが何代にもわたって受け継がれている。

江戸時代、商家は祭りの間、商いを休み、博多の町は山笠一色に染まったという。現代でも、振興会の役員はほぼ通年で祭りに携わり、当番町（流を取り仕切る町で持ち回り制）や各流の幹部も数カ月は祭りの準備に費やす。
祭りに熱くなった人を「山笠のぼせ」と呼ぶが、この祭りが長きにわたって引き継がれてきた根幹には、単なる熱さだけではなく、秩序やしきたりがある。これについて豊田会長は、「事故を起こすと危ないので、自然と律して規則やしきたりを守るようになる。そのためには経験が必要となり、山笠では、経験を持つお年寄りが重んじられる。昇き山笠では、お年寄りが孫やひ孫の手を引いて、山笠の前後を走る姿もなじみ深い光景」だと語る。

受け継がれる地域コミュニティ

さまざまな人の参加が長い継承に
どの地域でも伝統行事は大切に守られているが、それでも衰退してしまうケースもある。そうした中で博多祇園山笠が

時代の変遷を経て、隆盛を極め続けているのはなぜか。
その大きな理由として、「山笠はしきたりを守りながらも古いものに固執せず、その時代に即して変化してきた」からだ



1 9日のお汐井（しおい）とり。箱崎浜でお汐井をすくう。2 山笠の舁き棒にかける舁き縄づくり。3 飾り山笠の山笠台をつくる「棒締め」。4 足場を組み、飾り付けていく。5 平成3年第1回目の飾り山笠「三浦北條軍」。6 平成27年のソラリア飾り山笠。



と豊田会長は語る。

明治末期までは「舁き山笠」と「飾り山笠」は区別されておらず、十数mの高さの山を舁いていた。しかし街に電線が整備され、事故が相次いだことから、祭事存続のため、舁き山笠は高さ4.5mに規定し、元の高さの山笠は飾り山笠として残った歴史がある。

また、地域コミュニティに深く根差す伝統行事ではあるものの、他所の者を受け入れる度量があることも特筆すべき点だろう。博多以外のエリアに飾り山笠を建てていることに加え、各流に加わることも後見となる紹介者がいれば可能だという。

13日の集団山見せでは、福岡・博多の政財界で活躍する知名士や博多に貢献した人が舁き山笠に「台上がり」する。支店経済とも言われる福岡市は、首都圏に本社を置く大企業の社員も多く、その支店長などが台上がりすること多い。

「全国の祭りが衰退する理由の一つに後継者不足がある。長く継承するためには、自分たちだけの祭りにしてしまうのではなく、さまざまな人々が参加することが

必要だ」と豊田会長は語る。

この博多祇園山笠を筆頭とする「山・鉦・屋台行事」の全国33の祭事は、世界無形文化遺産候補としてユネスコに一括提案されている。

「西鉄は最大の協力企業の一つ」と豊田会長も語るように、西鉄はさまざまな取り組みを通じ、地域と一体となつて博多祇園山笠を盛り上げている。

都市開発事業本部長を務める清水信彦取締役・執行役員は「街の人々と一緒に祭りを盛り上げる中で、ビジネス上ではなく、一個人としてお付き合いをさせていただく。そうして育んできた地縁があるからこそ、まちづくりについても忌憚のない話し合いができるようになる。通常は利害が合わなかったり、競合したりということになるが、天神地区は皆が同じ方向を向いて、それぞれに邁進できる」と語る。

街が祭りを育て、祭りが街をつくっていく。そして、そこに人がいる。博多・祇園山笠の繁栄は、福岡・博多という地でそれが何代にもわたって続けられてきたことを映し出している。

平成27年度 ソラリア飾り山笠カレンダー

6月2日（火）
「棒洗い」神事

1年間保管されていた6本の舁き棒を、博多埠頭の北端にある櫛田神社浜宮で、博多湾の海水で洗い清める神事。

6月8日（月）
「小屋入り」神事

山笠台の部材や縄、さまざまな道具を並べ、安全を祈願する。櫛田神社の神職が祝詞を上げ、お祓いする。

6月24日（水）
「棒締め」

6本の舁き棒を山笠台に巻き付け固定する作業。山笠台は、くぎや金具を1本も使わずに麻縄だけで組み立てられる。

6月27日（土）～30日（火）
飾り付け

7月1日（水）
「御神入れ」神事

（ソラリアプラザ1階「ゼファ」）
飾り付けが終わった飾り山笠に神様を招き入れ、山笠を神の依代とする。櫛田神社の神職がお祓いする。

飾り山笠公開

山笠は、もう一つの人生

全国にその名をとどろかす博多の夏の祭礼、博多祇園山笠。「山笠があるけん、博多たい」——福岡市民が最も誇りとする伝統ある祭りである。子どもにとっての山笠、男衆にとっての山笠、女衆にとっての山笠。山笠は博多の人となりをつくるものでもある。故郷を愛し、山笠に毎年参加する長谷川法世さんにお話を伺った。

「博多町家」ふるさと館 館長

長谷川法世

Hosei HASEGAWA

権威におもねることなく花開いた祭り

博多祇園山笠は、博多の総鎮守櫛田神社の最大のお祭りです。その起源は諸説ありますが、仁治2（1241）年に承天禅寺の開祖・聖一国師が、博多の町に流行した疫病退散を祈祷し、若い衆に担がせた施餓鬼棚に乗って清めの水をまいたことに由来するというのが公式見聞となっています。

同じ祇園会でありながら、宮廷文化が反映された京都の雅な山鉦とは全く違いますね。博多祇園山笠には、荒々しさがあります。古代、集落中の男たちが一つの目的に向かって、わあーと叫びながら疾走していく。原初的な男の本能に訴えかける、野性と呼ばれるような、そんな祭りだと僕は思います。

また、それは地理的な要因もあって、日本最古の国際貿易港と言われる博多は、「海」の血が濃い。海民、海人です。気性の荒いところがあり、また中央から離れているので、権威におもねることなく、自分たちの好きなように祭りをつくっていくことができたんでしょう。山笠の行事の一つに、箱崎浜まで清めのお汐井（真砂）を取りに行く「お汐井とり」がありますが、これも博多人がもともと海の民であったことを物語る証左かも知れませんね。

山笠の人生はもう一つの人生

「のぼせもん」とは博多弁で、夢中になるという意味で、山笠に夢中になる人を「山笠のぼせ」と言います。いったん事が始まると、のぼせあがるわけですね。オフィスで、さっきまでスーツを着ていた同僚が、法被に着替えて抜け出して行ったなんていうのは、よく聞く話で、職替えする人も大勢いる。当番町になるとか、一番山笠が巡ってくるとかになったら、何年も前から気合いが入っていますから。

山笠は、博多町人の自治制度と厳しいしきたりを守ってきた男たちの祭りです。もう一つの人生、パラレルなんです、山笠の人生は。普通の人生は働いて食うのが人生だけれど、山笠の人生はどれだけ山笠につけたか、ちゃんと役割を果たすことができたか、あるいはどんな役をもらったか、役に就いたか——金にはならないし、手出しばかりだけれど、そこに人生がある。「流」によって、しきたりは異なりますが、山笠に貢献した人を偲び、慰

霊に昇き山笠を故人の自宅前に昇き入れる追善山笠というものもあります。山笠のぼせにとって、最高の名誉ですね。

女衆にとっても同じです。表には出なくても、炊き出しやら何やらの手伝いをし、男衆の留守を守る。女同士の連帯があり、町内の結束を育てます。

そして何より山笠は、子育ての場でもあるんです。赤ん坊の頃から父親に抱かれて、他の子どもが走っているのを見ると、子どもは早く自分も一緒に走りたいって思う。五つ、六つになると、子どもばかりのところにいられて、それが親離れ、親の子離れになります。年長の子もたちは、先頭を走る幼い子らを守る。幼い子は幼いなりに、集団の中での約束事を学びます。

小学校高学年になると流の名や町名を大書した幅一尺（約30cm）、長さ一間（約180cm）の「招き板」を掲げて、前走りをする大事な役目があります。沿道の観客の注目を集めて先頭を駆け誇る誇らしさ。山笠に貢献できる喜びや責任感が、子ども心にもしっかり刷り込まれるんですね。大人たちのカッコいい後ろ姿に憧れながら、世間の仕組みやしきたり、上下関係を学んでいく。そうやって一人前の男に成長していく。そんな仕組みが山笠にはあります。

時代とともに変わるもの、変わらないもの

高度経済成長期、全国的にお祭りが廃れていきました。お祭りにうつつをぬかすより、がんがん働けば収入が上がる。そして町内に住んでいる人口も減ってきました。それに対応するやり方として、伝統には反するけれども、例えば他所から人を入れてやっていく。そういうノウハウを山笠全体で共有して、いろいろな問題をクリアしてきたので、山笠はどんなことがあっても乗り越えられると思います。

山笠のぼせは、生涯現役です。年を取っても締め込みができる限りは締め込みをして、その後は年寄り帷子を着て山笠のそばにいる。赤ん坊から年寄りまで、三世代、四世代と一緒に山笠を走らせる。山笠があって、人生がある。

しみじみ濃密な人のつながりがあるんだなあと思います。いいところに生まれたと思いますよ。

Profile

福岡市博多区生まれ。昭和43年漫画家デビュー。代表作に『博多っ子純情』『がんがらん』など多数。NHK朝の連続テレビ小説の原作となった『走らんか！』など小説・エッセイも多数ある。平成16年より九州造形短期大学客員教授。昭和55年博多町人文化勲章、平成18年福岡市文化賞、19年福岡県文化賞受賞。



新しい祭り

福岡・博多では、伝統行事のみならず、新たな祭りやイベントが次々に生まれ、成功を収めており、西鉄が基盤をつくったものも多い。新たな祭りによって生まれる新たな魅力で、街は一層多面性を持ち、さらなる飛躍を目指す。

各チームがオリジナルの踊りを競う

「ふくこいアジア祭り」

福岡・博多の三大祭りと言えば、「博多どんたく」、「博多祇園山笠」、そして9月に行われる「放生会」を指すが、祭り好きのこの地の人々は「秋から冬にかけての祭りが少ない」と声を揃える。

もちろん、それだけの理由からではないが、この十数年の間に、秋から冬にかけて開催される祭りやイベントが次々と生まれ、福岡・博多の新しい魅力を発信している。

毎年11月に行われる「ふくこいアジア祭り」は平成12年に始まった。高知を本場に全国に広がるよさこい祭りの流れを汲んだ祭りで、九州内外から約90チーム、約3000人が参加して、オリジナルの踊りを競う。

西鉄グループでは、若手の社員が中心となつて約50人の「西鉄よさこい連」を結成、毎年参加している。メンバーは祭りまでのほぼ3カ月半、就業後に週に1〜2度の練習を行うが、その努力が実つて昨年は93チーム中、6位入賞を果たした。

「去年は新入社員として参加して、仕事も慣れない中で練習するのは大変だった



西日本鉄道株式会社「西鉄よさこい連」の皆さん (左から)
山石有紀美さん (総務広報部 広報課)
泉田幸徳さん (総務広報部 庶務課)
棕野雅大さん (都市開発事業本部 ビル事業部 開発リーシング課)
山口美波さん (SC事業部 ソラリアプラザ)

が、大人になってステージ上でスポットライトを浴びて、一丸となつて踊るのがとても楽しかった」と総務広報部の山石有紀美さんは振り返る。

SC事業部ソラリアプラザ担当の山口美波さんは長崎出身で、福岡・博多の人々について「お祭りに参加している人も見ている人も熱い人が多い。祭りに対してのエネルギーが大きいと思う」という感想を持つ。

事務局として携わる総務広報部庶務課の泉田幸徳さんは、参加する社員に対して「当社は熱い人間が本場に多い。皆で懸命に踊ってステージがうまくいったと

特集：祭りと地域コミュニティ

【西日本鉄道が育てる新しい「地縁」のかたち】

き、グループの社員として一緒に達成感を味わえるのが魅力」と語る。

リーダーの都市開発事業本部ビル事業部開発リーシング課の椋野雅大さんは「昨年、好成績を残せたことで西鉄よさこい連の存在が社内外に周知されるようになった。今年も皆がやる気に満ちて練習しているの、それを生かしたチームづくりをして、さらにいい結果を残したい」と意気込みを見せている。



1冬の恒例イベントになったクリスマスイルミネーション。2、3アジアンパーティの主要イベントの一つ「アジア太平洋フェスティバル」。4街中に音楽があふれ出す九州最大級の音楽フェスティバル MUSIC CITY TENJIN。

アジアと創る「アジアンパーティ

「福岡」からアジアの拠点都市「FUKUOKA」へ。9月から10月にかけては「アジアンパーティ」が開催されている。平成2年に始まった「アジアマンス」がより時代のニーズを捉えた総合イベントに昇華、「アジアと創る」をコンセプトに平成25年リニューアルされた。

「アジア太平洋フェスティバル」や「アジアフォーカス・福岡国際映画祭」、「福

岡アジア文化賞」、クリエイティブ・エンターテインメント都市・福岡をPRする「The Creators」などの主要事業のほか、関連イベントを実施し、アジアのヒト・モノ・情報が集う社交場をイメージして、文化交流や振興を図る。昨年は21のイベントに約46万人が参加し、その一つとして、ソラリアプラザでは、「TAIWAN EXCELLENCE」と題した台湾製品の体験イベントが行われた。

音楽があふれる「ミュージックシティ天神

「MUSIC CITY TENJIN (FUKUOKA MUSIC MONTH)」は、西鉄にとって特にゆかりの深いイベントだ。天神の活性化と福岡の音楽的環境の向上を目的に、平成14年に西鉄の天神委員会が立ち上げた音楽祭だが、音楽都市・福岡ならではのイベントとして定着。現在では九州最大級の音楽イベントに成長した。

福岡市役所西側のふれあい広場をメインステージに、公園やソラリアプラザなど天神地区各所やキャナルシティ博多、博多駅などに特設ステージが設置され、プロ・アマ問わず多くのアーティストが出演する。期間中、福岡周辺でさまざまな音楽関連イベントが行われ、福岡市は糸島市と共同で9月の1カ月を「福岡ミュージックマンス」と命名している。

冬の祭りの創出「クリスマスイベント

ところで、平成13年当時、設立間もなかった天神委員会が企画し、大成功を取

めたイベントがある。「天神のクリスマスへ行こう2001」で、その後は「We Love天神協議会」に引き継がれ、天神地区のクリスマスシーズンのイルミネーションやイベントは、この季節の風物詩としてすっかり定着した。

クリスマスイベントは、JR博多駅周辺地区でも開催しており、これまで両エリアを統合したパンフレットの作成などを行ってきたが、中洲地区とともに連携して、広域のイベントとしてさらに発展させる構想がある。

「単発のイルミネーションはほかの地域でもやっているが、一緒に盛り上げて、広域の賑わいをつくりたい」と清水取締役は語る。

天神地区・中洲地区・博多駅地区は徒歩で約30分。イルミネーションやイベントを楽しみながら周遊すれば、福岡の冬の魅力を存分に楽しめるだろう。

「現在は福岡市近郊から訪れる人が多いが、連携して規模が大きくなることで、県外や国外からも人が集まるようになる。札幌の雪まつりのように、遠方からでも行きたいと思ってもらえる冬の祭りに育てていきたい」（清水取締役）

「地域の盛り上がりがどんどん広がっているし、今後さらに広がってもらいたいと思う」という言葉に象徴されるように、各地区で競争するのではなく、総参加と連携とともに盛り上げる。ともに楽しもうというオープンな気質、1年中祭りの熱気に満ちたこの街の勢いはとどまるどころを知らず、今後も発展を続けていくだろう。